モンゴル国における弓射の身体文化の特性に関する研究

井　上　邦　子
奈良教育大学　特任准教授
（現　奈良教育大学　准教授）

緒　　言―研究の背景と目的―

モンゴル国において毎年７月に行われる三種の伝統スポーツ（相撲、競馬、弓射）の祭典「ナーダム祭」は、2010 年ユネスコ無形文化遺産に登録されたことで国外からも注目が集まるようになった。その一つに数えられる弓射は、1225 年（諸説あり）に建立されたといわれるモンゴル最古の文字資料イェスンゲ紀功碑に遠矢の記録が残されていることからも、古くから当地に根差した身体文化であると伺い知ることができる。

こうした当該文化の弓射に関する先行研究は十分に蓄積されているとは言い難いが、その中で弓矢を呪具として捉えその呪術性を明らかにしたものは重要であると考えられる。たとえばウノ・ハルヴァ『シャマニズム』[1)]によれば、アルタイ地方のシャマンは悪霊を払うため装束や太鼓に弓矢の模型をつけたり、弓を一種の楽器として用いたりしたことを述べている。さらに護雅夫[2)]の研究によれば、北東および北アジアの狩猟・牧畜社会では社会・経済・政治単位を「矢」と呼んだことから矢は領土や統治権を象徴的に表すことを述べている。また、シャマンの呪具でもあったことから、シャマンと同様の力を得ようとした権力者の持ち物になったと説明している。これらの先行研究によりモンゴル国周辺地域の弓矢が、単なる狩猟や戦闘の道具に留まらず象徴的意味を持つ呪具として考えられてきたことは明らかであろう。

ただ、先行研究にみられるようにモノとしての弓矢に注目するのではなく、「射る」行為自体に注目し、その身体文化の特性を明らかにしたものは、管見ながら見当たらない。そこで本研究では、現在モンゴル国では弓射競技がどのような形態で伝承されているかについて調査し、行為としての弓射の文化的特性を明らかにすることを目的とする。

研究方法

本研究における現地調査は 2012 年７月７～ 14 日、および 2013 年２月 18 ～ 22 日の２度にわたって行った。７月に行った１度目の調査においては、ウランバートル市において行われたナーダム祭において、弓射競技の現在の競技方法を明らかにすることに主眼をおいた。翌年２月の調査では、競技者、競技団体責任者および弓矢の製作者等に聞き取り調査することで、弓射文化の一端を明らかにすることに努めた。

結　　果

1　競技の種類と方法

現在ナーダム祭などの競技大会で使用されている弓矢の道具は、近代的なものから伝統的なものまで様々である。その中、伝統的な弓（ノムＨｙｍ）はヤナギの木を芯として、大鹿の角と牛の腱を膠で張り合わせて作り、ラクダの革や羊の腸（現在は化学繊維が多い）を弦とした、長さ 1.5 m前後の短弓である。矢（ソムｃｙｍ）は白樺などにシカの角や蹄（現在はプラスチック）を矢尻とし、コンドルの羽根（尾羽をよしとする）を矢羽とする。もともと矢は騎馬で戦闘する折、すぐに番えられるという理由から弦の右に番えていたが、現在は国際的な競技スポーツ[3)]であるアーチェリーに倣い、（右利きなら）左に番える射手も増えている。審判は第三者が担うのではなく競技者が交代で受け持ち、ジェスチャーと歌うような大声で結果を知らせる。

毎年7月に首都ウランバートルで開催される国家主催のナーダム祭では、競技方法が3種に分かれている。まず、「民族の弓射」とよばれる形態で、現在のモンゴル人口約75％を占めるハルハ族が受け継いできた競技方法である。例年7月10日から12日にかけて個人戦と団体戦が行われ、男性が75m、女性は65mの距離よりソル（ｃｙｐ）と呼ばれる小さな籠状（ラクダの革製）の

写真１　ナーダム祭弓射競技

写真２「民族の弓射」のソル

写真４　ウリャンハイ式弓射のソム

ものを積み上げた的（60個積み上げた「ハナ（ｘａｎａ）」とよばれる的と30個積み上げた「ハサー（ｘａｃａａ）」とよばれる的の2種類）を射て、40射中的中した数を競う。優勝者にはメルゲン（ｍэｒｇэｎ＝弓名人。賢者、占者の意味もあり）という称号が与えられる。

もう一種は「ウリャンハイの弓射」と呼ばれる方式で、ナーダム祭では７月７日に競技が行われる。元来モンゴル北部（フブスグル県周辺）に居住しているウリャンハイ（別名ツァータン＝トナカイを持つ者の意）とよばれる集団が伝承してきたものである。現在でも男性のみの参加に限られ[4)]、女性が用具に触ることすら禁じられており、弓射競技の中でも古い「伝統」を保つと関係者の間で認識されている。的は革紐で編んだ円形状のソルを横一列に並べ、前後に土（ナーダム祭以外では家畜の糞や雪などで作られる）で作った障害の壁を設け、矢がその壁を超えて的に中り３ｍ以上転がれば的中となることから、強い矢を射る力が必要とされている。

写真３　ソルを積み重ねて的を作る（「民族の弓射」）

手を挙げているのは審判役で、結果を歌とジェスチャーで知らせる。

写真５　ソルを並べてその前後に壁を作る[5)]（ウリャンハイ式）

残る一種は「ブリヤートの弓射」と呼ばれる方式で、ナーダム祭では7月8日に競技が行われる。主にモンゴル北部（フブスグル県周辺）に居住しているブリヤートと呼ばれる人々が伝承してきた方式の競技である。30ノム（ノム＝弓。約45 m）の距離から8射、20ノム（約30 m）の距離から8射行い、それを4セット（合計64射）行う。的は中央に細い赤い的を立て、その両側に10個ずつ円筒枕形の的を寝かせて並べることを特徴としている。中央の赤い細い的に中れば2点、その他の的は1点として競技を行う。

写真6　ブリヤート式弓射の的[6)]

2　弓射の儀礼

現在モンゴル国の弓射は前章で述べたようにナーダム祭の一種目として、競技スポーツ化――ルールの明文化、競技組織の確立、ドーピング検査の導入など――しながら伝承されてきた。特に人口の大半を占めるハルハの人々の間では、弓射といえば専らナーダム祭で競われる競技化したものを指す。しかし一方で、少数派集団であるブリヤートやウリャンハイの人々の間では、儀礼に弓射文化を伝承していることが今回の調査でわかった。当該文化の弓射文化を考える上では、こうした儀礼としての弓射は看過できない重要なものだと考えられる。

儀礼としての弓射でまず特徴的なものとして挙げられるのは、両集団とも新年に弓射を行う習慣があるということである。新年に際して行われるオボー[7)]祭りにおいて、メルゲンの称号をもつ名人が天に向かって3回弓を射る行為を行う。これを行うことで、シャマニズムを背景とする信仰の対象であるテンゲル（天神）に祈ることになるという。天に向かって射て、戻ってきた矢は、特別な絹布（ｘａｄａｇハダッグ）に包んでゲル（ｇｅｒ天幕式住居）内に飾り魔よけとする。

また新年各家庭においても一家の主が祈りを捧げた後、ゲルの内から天窓（ｔｏｏｎｏトーノ）に向かって真上に3回弓を射る。こうして天窓より外に矢を射出すことにより、邪悪なものが排除されると考えられている。その後、住居の前で地面の的を射る形式の弓射を行い、各家庭を祝福する。矢を射る方向は近隣の川の流れと同方向が良いとされ、それにより〈力〉が矢に付加されると考えられている。

こうした一連の弓射競技は一日ごとに各家庭を巡り、新年の数日をかけて家々を祝福して回る。特にウリャンハイの人々の間では、男児の誕生を願う家庭の前で弓射を行うことによって男児が授かると伝承されているという[8)]。

また新年の儀礼以外にも、乳児の服装の首の部分に弓矢の小さな模型を飾ったり、妊婦の腹部を弓の弦でさすり安産を祈祷したりする習慣があることが明らかになった。紙面の関係上他の事例は省略せざるを得ないが、道具としての弓矢はもちろんのこと、射る行為にも特別な意味づけをしている事例が今回の調査によって確認できた。

考察とまとめ

現在モンゴル国の弓射は、地域によりルールや的の形態の若干の差異はあるものの、地面に置かれた的を射る形態をもち、主にナーダム祭において伝承されてきた。そのナーダム祭競技は、モンゴル国自体が1990年代以降市場経済を受け入れ、その後グローバル化に倣うように、急速に競技スポーツ化が進行しているといえる。弓射はその中で、観光資源として必要な「モンゴルらしさ」は残しつつ、ルールの明文化、数値化、ドーピング検査の導入、道具の近代化、矢の番え方の「国際化」など、「グローバルスタンダード」を意識したともとれる変化が見受けられる。

しかしその一方で、天に向かって垂直方向に射る弓射が、一部の少数派集団によって儀礼的に伝承されていることはモンゴルの弓射文化を考える上でも重要なことである。矢を射ることは、彼らの信仰の対象である天に祈りを届けることであり、その矢は辟邪の意味をもち、天と「我々」を繋ぐ。こうした儀礼的な弓射を、ナーダム祭で優勝した「メルゲン」が担っているということにも注目したい。

以上を考慮に入れると、ナーダム祭の弓射競技は単に的中した点数を競うというよりも、天へ正確に力強く願

いを届けることができる腕と技をもつ「我々の代表」を選んでいると解釈できる[9)]。弓射競技者に「どのような人物がメルゲンとなれるか」という問いに「対戦相手によいアドバイスができる人物」との答えがあった。加えてモンゴルの弓射では、客観的判断を下す「審判」は存在せず、「我々」が互いに判断し合う。

すなわち、互いの競技者同士は、「競技スポーツでいうところの敵」ではなく、「天」の元に同じ「祈り」や「願い」を共有できる共同体である。モンゴルにとって弓射は「敵」に勝って「自己」を立ち上げる装置というより、だれが「我々」の願いを託すに足るメルゲンなのかを選び、そのメルゲンの身体に自己を交錯させるような身体文化である。こうした弓射の身体は、「自己／敵」「主／客」という単純な二元論に還元できない特性をもち、近代競技スポーツひいては現代社会の指す「競う」という概念を逸脱する強度があるのではないかと考えられる。

謝　　辞

このたび、公益法人三島海雲記念財団より平成２４年度学術研究奨励金のご支援をいただいた。ここに記して、関係者各位に心から謝辞を申し上げたい。また、C. Батхуяг氏(モンゴル弓協会)、XYдэрчулуун氏（ブリヤート弓協会)、T. Хонгор氏（ウリャンハイ弓協会)、阪田弘道氏（JICA）からは貴重な情報を提供していただいた。合わせてお礼申し上げたい。

註および引用・参考文献

1）ウノ・ハルヴァ：シャマニズム――アルタイ系諸民族の世界像――（田中克彦訳)、三省堂、1971.
2）護雅夫：北方文化研究報告、7、1952、pp. 81-96.
3）本論では、勝利や記録達成を目的とし、オリンピック競技に代表されるように、国際的な統一ルールのもと、組織化された運営によって競技会形式で行われるスポーツを指す。
4）ナーダム競技（相撲・競馬・弓射）は現在、相撲以外では男女ともの参加が認められているが、もともと、「男の三種の競技」と呼ばれ、男性のみに参加が制限されていた。
5）写真：阪田弘道氏提供
6）写真：阪田弘道氏提供
7）土地の守護神とされる石の堆積。峠や山上などにみられる。
8）ウリャンハイでは男児が３歳になると個人用の弓矢を用意するという習慣がある。
9）モンゴルの英雄叙事詩などにもしばしば天に向かって垂直方向に射る弓射が登場する。たとえば『ゲゼル・ハーン物語』において、主人公ゲゼルがライバルの勇者と弓射競技をする場面があるが、そこでも矢は天の方向に射られ、誰が長い間空中高く射ることができ元の場所に返すことができるかが競われた。ゲゼルの射た矢は天上界の助けを得ることができ、結果勝利する。
　本研究では、英雄叙事詩でみられる垂直方向への弓射が、現在でも儀礼の中で伝承されていることを明らかにすることができた。